

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 常葉大学大学院 学校教育研究科
	事業名： NITS・常葉大学教職大学院コラボ研修プログラム
	研修等名：【NITS・常葉大学教職大学院コラボ研修】 教師自身の「主体的で対話的な学びの場」となるコラボ研修 「実社会で求められている労働者像」～企業から教育現場に求めるものは？～
	開催日時：令和6年12月2日 14時～16時30分 開催場所：常葉大学（静岡県静岡市駿河区弥生町6番1号） 参加人数（総数）と参加者の属性：（38人）一般教員13人、行政職員1人 大学院生19人、学部生1人、大学教員4人

目的：

- 1 教師自身の「主体的で対話的な学びの場」となる研修を目指す。
「教師自身の『主体的で対話的な学びの場』となるコラボ研修」をテーマとし、これまで行ってきたコラボ研修を再構築する形で実施する。グループワークを活動の主軸とし、参加者を主語とした研修を目指す。
- 2 参加者が自身の教育活動の意義や役割を見つめ直すことができるようにする。
特定社会保険労務士の杉本忠重氏を講師として招き、実社会で求められている労働者像について学び、学校現場で求められている資質・能力とのギャップを知ることを通して、日々取り組んでいる教育活動の意義や役割について参加者自身が見つめ直す機会となるようにする。

内容：

- 1 グループの顔合わせ
開会行事終了後、研修への参加目的別に分かれた5～6人のグループで、研修目的や研修に期待すること等を交えながら互いに自己紹介を行った。
- 2 講師の講話
「実社会で求められている労働者像」～企業から教育現場に求めるものは？～というテーマで、特定社会保険労務士の杉本忠重氏の講話を聞いた。教育現場で大切にされている主体性や創造性は、中小企業の単純労働においては、時に邪魔になることがあるという事実を知らされた。
- 3 グループ協議
研修への参加目的に基づいて構成された小グループごと、労働の現場における価値観と教育現場における価値観とのギャップにどう向き合っていけばよいのか話し合った。
- 4 グループ発表
グループで話し合ったことを発表した。「小中学校から高等学校、大学と発達段階に応じて行われるキャリア教育をより系統的に行っていかなければいけない」、「単純労働をいかに価値付けていけるかが問われている」というような講演内容を受けた意見だけでなく、「労働者を育てることが教育の目的ではないし、労働だけが人生ではない」といった講師への反論とも受け取れるような多様な意見が出された。
- 5 講師の講評
発表を受け、講師に講評をもらった。講評の最後には、「お金で問題を解決するのが私の仕事。皆さんとの考え方の違いを知り、大変勉強になった」という言葉があった。その後、閉会行事を行い、研修を閉じた。

成果：

- 1 一般企業における労働について、新たな知見を得ることができた。
(参加者の声)・驚くような内容だったが、納得もできた。社会が求めている労働者像がよく分かった。
・労働者の実相を知る機会として、大変貴重だった。
- 2 キャリア教育を進めていく上で、貴重な視点を獲得することができた。
(参加者の声)・目的のもの（話）が聞けて、とてもよかった。今後のキャリア教育に生かせそうである。
・キャリア教育を学校で進めていく上で必要な視点を教授いただき、勉強になった。
- 3 参加者自身の教育観を捉え直す場となった。
(参加者の声)・労働者という視点から、教育を見直すことができた。
・教育の意義について、普段とは違ったシチュエーションで考えることができた。
・学校教育として、何を与えられるか考える機会になった。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

1 教育界以外の方を講師に招いて学ぶことの意義

今回の講師は、200 社もの一般企業に関わる特定社会保険労務士という資格を持った杉本氏である。今、教育現場では、子供の主体性を伸ばすことに力が注がれているが、中小企業の単純労働の世界においては、役に立つことは少ないとのことである。それにも関わらず、単純労働に携わる人が、全労働者の半数を占めるらしい。主体的・対話的で深い学びを目指して日々、教育活動に取り組む者にとっては、にわかに受け入れがたい内容であったが、それは紛れもない事実であり、否が応でも教育の意義や役割について見つめ直さなければならない機会となった。

2 問題提起型の講演のよさ

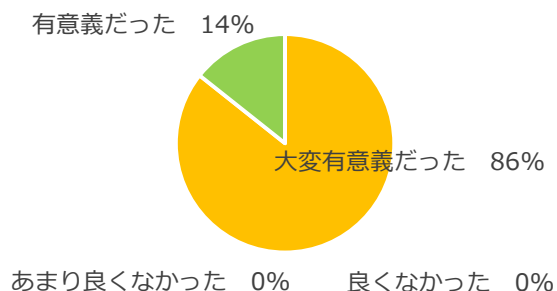
今回の講演は、教育に携わる者にとっては、ある意味ショッキングな内容であったが、それを受けて教育現場ではどうしていけばよいかは講師から示されなかった。

それ故に、参加者はその事実をどう受け止め、どう解決していったらよいか真剣に考えることができた。グループワークが前回にも増して熱を帯びたものになったことは間違いない。

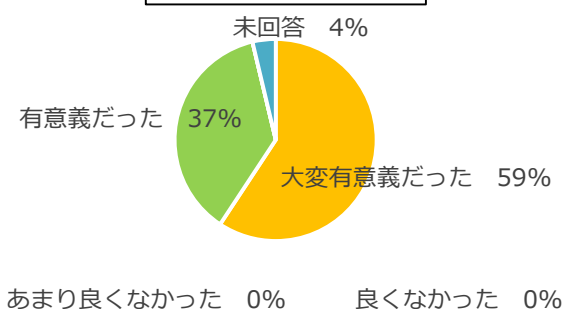
3 立場の違った者同士でグループを組むことのよさ

今回のグループは、参加目的別に構成されたものであったが、なるべくいろいろな立場の者で構成されるように配慮した。それにより、グループ内でも多種多様な意見が出された。特に校長という立場の参加者が、学生に対して、「教育の意義や役割について語る姿が印象的であった。

講演の有意義性について



グループワークについて



アイデアや工夫したこと：

1 研修への参加目的を事前に聴取し、研修実施後はその目的に応じて振り返りをしてもらったこと

本研修に参加する参加者の意識を高めるとともに、主催者として参加者のニーズを確認するため、事前に一人一人から研修への参加目的を聴取した。また、その状況を研修実施前に講師にも伝え、講話に生かしてもらえようにした。参加者の研修への参加目的は下記の通りである（大学教員分は含まず）。

（1）実社会で求められている労働者像について知りたい。（17 人）

（2）キャリア教育の授業づくりに生かしたい。（6 人）

（3）教員（又は社会人）としてキャリアアップを図りたい。（11 人）

（参加目的の選択肢としては、「特定社会保険労務士の仕事について学びたい」というものと自由記述によるものも設定したが、今回、選んだ参加者はいなかった。）

また、研修実施後は、参加目的が達成できたかどうかについて、参加者に振り返りをしてもらった。（57%の参加者から「目的が達成された」という回答を得ることができた。）

2 参加目的別に分けたグループによるグループワークを活動の主軸としたこと

グループワークを活動の主軸にし、講話もグループワークの中に組み入れる形にした。それにより、グループとしての親密度が高まり、講話後のグループ協議にもスムーズに入っていくことができた。また、同じ参加目的の者でグループを組んだことにより、グループ協議でもつつこんだ話し合いをすることができた。加えて、グループでの話し合いを確認しながら記録するツールとして、円形ホワイトボード（えんたくん）を用いた。これは、グループ発表の際に、全体への提示資料としても活用できた。



講話の様子



グループ協議の様子



グループ発表の様子